

付録4：熊野神社調査報告 (1/6)

吉野熊野神社調査報告

昭和五六年七月二十五日調査 山下生六 高橋高一

七月二十五日、吉野部落の代神熊野神社の社殿
鳥居など修理を行うので、御神体など、出し
て仮に安置するとの連絡あり。二、三のより
神社に参拝して調査を行う。

① 御神体について

写真は見せてははいけないうので、
見るだけとなる。シガバケの像がある
のを見出し、葉玉とりのどくことにな
り、五体の像を取り出し調査することな
る。皆、箱に入り、ミスエがけである。
スケールによらず、寸法を測ることも
出さないので、目算で記す。
○ 神体の神々は五体あった。

- (1) 右より (1) 廿身の立像? 彩色木彫
 - (2) 弥勒菩薩 身体金色他は彩色
 - (3) 葉師如来 オベア金色
 - (4) 天神様 彩色木彫
 - (5) 立像である
- 江州モ 江戸時代の作品である
二の中で (1) (2) (4) (5) は同じ時代のもの
と認められる。元々は (2) (3) だけだった

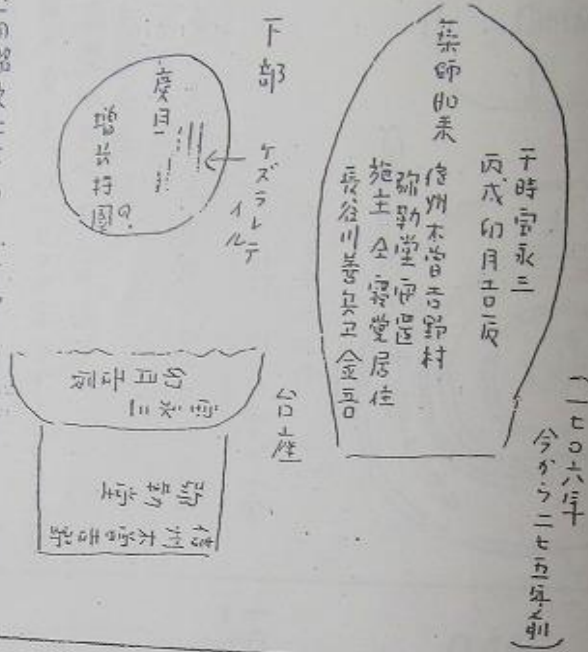
いたもので (1) (4) (5) は他の場所から移し
て合祀されたという。
大御所様

- (1) (2) (5) はいすれも
岩座に乗っている
- (4) は四角の箱座
- (3) は蓮の座に乗
っている オベア
木彫に彩色して
ある
- (2) 弥勒は体は金色
である
- (3) 葉師はオベア
金色である
- (4) 天神様といふが
カニムリはない
紋は梅がなく
勢の文が正面
についている
- (5) 元、吉野代官の
祠にあってたもの
という

元来 (1) 江戸初期中期にかけ

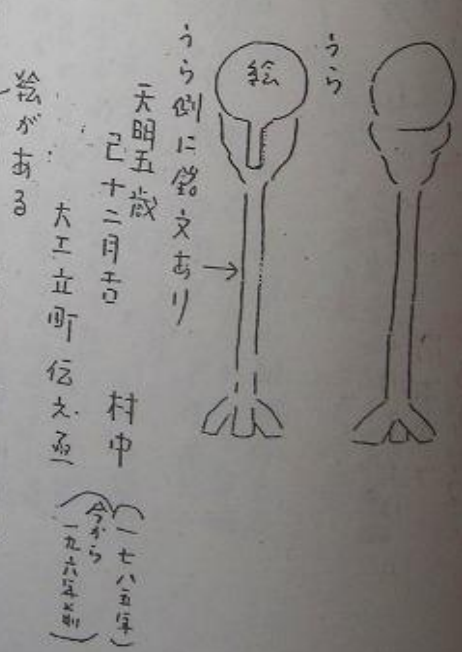
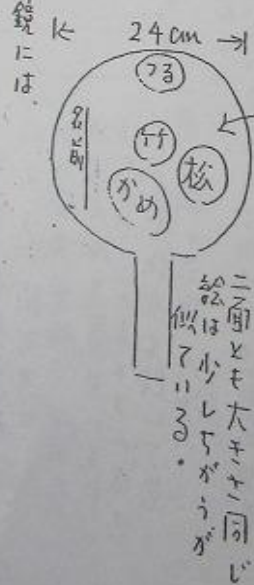
付録4：熊野神社調査報告 (2/6)

この銘文によると、吉野の弥勒堂へ、寝堂の
 正世屋の長谷川善兵衛が寄進したもので
 ある。

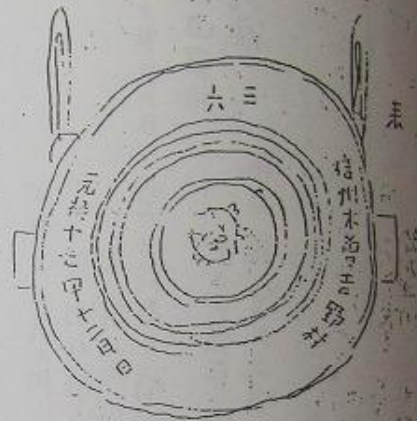
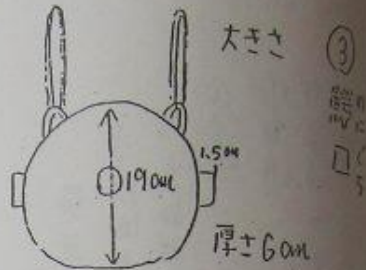


(3) 築師に記されている銘文
 光背のうら
 文字は「築師如未」のみ記されている。
 他には「何ま至りて」などない。

鏡には
 天下一稻村備後掾吉良氏
 と彫られている。江戸中期の作
 と推定される。



付録4：熊野神社調査報告 (3/6)



図は急いで描いた少々いびつであるが
略図である。

信州木曽吉野村

三六 元禄十七年甲子二月日

の銘がある。(一七〇四号今より二七七年以前)

うらの

廿年という文字は 隠すか

菩提 という意味がある

うらの上には

廿年の文字が二字

④ 神社のお札



この文字は何がどの箇内
があつた

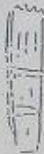


これは梵字と組み合せた
そのど、印皮がうら平寛時
代に中国よりへて日本に
伝つた文字

この文字を銅板に、どの仏身の
梵字がゆがらなかつた。
奈良の吉野の古寺にこれと同じ
ものがある。部落の人はいらる。
一月六日の祭日にこの札を部落に刷り
くばるといふ。



一本で彫った炭入れに
コウゾの木を焼いて炭
をふくり、こまかくつぶし
水を入れた墨をふくり
漆の皮を塗つて仕上げた
刷毛で、版木から
お札を作るという
あずらしい札づくりで
ある。



付録4：熊野神社調査報告 (4/6)

① 年号順に記名された庄屋名・棟札

- ① 鰯口 元禄十七年 (一七〇四年) 二七七号前
- ② 茶師 宝永三年 (一七〇六年) 二七五号前
- ③ 棟札

(表) (一七三三年 二四八号前)

享保拾八歳 殿主 ありと又三郎
 奉納御棟札敬白 せきり惣右五内

癸天五 十月廿九日 大工 三浦清十郎
 同 侍共
 同 侍八郎

木引 清右五内

(うら)

村中覚

金三兩 エニリヌ七
 六百文 いっすて七匁
 六百文 目 三万八
 六百六十文 馬四郎
 金二兩 木下八郎
 六百五十文 山姥八郎
 五百文 同 みの庄
 三百文 木下長七
 金一分三拾文 中中平
 六百五拾文 中中平
 八百文 越中平
 金一分貳拾四文 中中平
 六百六十文 同 三井成
 金一分 小御宿五内
 五百文 三浦清十郎
 八百文 大畑五内
 金一分 寺田新蔵
 三百文 同 新八
 金壹分 ありと又三郎
 銀一匁 木下友成
 金一分 約三十三
 金壹分 ありと又三郎
 銀百七十文
 八百文 又三郎 中中平
 金壹分 三井成 十文
 六百六十文 同 水口主人

(表) (一七三三年 二五八号前)

享保八歳 仰 立町大工
 奉納御棟札敬白所 三浦徳三
 同 侍共
 八月廿日 坂村木引七郎

(うら) 七月廿一日 せきりめ

大工 工知三三拾工 呂木化四
 石火 木引同貳拾五工同 金三分 銀百六文
 金壹分
 白米三斗五升

(表) (一七七四年 二〇七号前)

甲午三月十三日
 右御せんぐう八 同日六日

(うら)

当社熊野神社本社今般東江
 御初め先ぐく文ニ代度出来仕候以上
 安永三年 神主
 甲午四月廿日 徳原護岐守 守諸
 枝原村庄屋
 清兵衛
 当由組頭
 久兵衛
 佐石五内
 新成
 久左五内
 久七
 右御人之者 同
 泉ノ

付録4：熊野神社調査報告 (5/6)

(箱のうら書)

(一七六七午 二一四年前)

明和四年

丁亥九月廿八日

吉石五内

久三郎

新七

棟札 年号は不明であるが、^{ミス}二箇のことで
昔りてあるので箱の年号と同じと見ゆ
れる。この二箇に入れ居その
札の記名は

(E)

熊野権現奉寄進御神前御着二箇

吉野村中

神主

徳原證岐守

(F)

(一八二三年 一五八年前)

文政六 癸未 歲四月廿四日

奉刻棟札

道清手置帆長命

棟梁 花原村

道清志理命

細澤 長重三長

天下五平国工全五彦成寛

原 仙哉

(うら)

文字があるがモシロなりが
まったくよじれていて不明

(G)

(一八二三年 一五八年前)

(癸)

癸未 文政六年

奉刻御本社殿前石垣宮前度系

未 四月十七日

徳原證岐守

(うら)

石先年御本社拜殿ら雪ろくか御座屋所
此度当村中一統お度々一切右之仕置候

組頭 前野久三郎
寺田新一

(H)

わけていて年号不明

奉置 尊待本社

同 野口虎吉

八月廿日

徳原証岐正

長常村神主

①御用札

同じものが二枚ある。

(癸) 上宮御用

ほそ長い札である。

(うら) 熊野大権現 神主 徳原証岐守

(文政のころのものと見られる)

現在でいう献上するときにつけた
荷札のような主のふと思われ。

付録4：熊野神社調査報告 (6/6)

本殿 建物

(宝) 字有り

神社の拜殿の天井には昔、山の測量に用いたという間縄がある。縄とは楯の甲にキキコトとむようになっている。現代の巻尺のえらみで、民俗学的資料として面白い。総馬千少しある。次回の調査として、くわく調査すれば、更にゆかると思われる。

神鏡の年号

(一七八五年一八九六年前)

天明五年

二木大の互(一八五四年一三七年) (二木大のうらに書かれてある)

奉納御伯犬 殿主

合度口

当村宿

壹百五拾文

嘉永七年

安正日吉日

大工上松

原 政喜の

境内にある二社は
右 ハ幡様が ~~祀~~ 祭
左 津島神社

この熊野神社は

昔は

熊野権現

と呼ばれていた

弥勒堂

とがわかる

したがって中に弥勒菩薩がまつられていた。念仏よこの土名場であったわけがわかる。

○二神王謹請一は

又政六代になつて、これと同じ二神王文政元年鹿嶋神社も、とりまいて、簡筆を報告とする。写真王とつてあるのが、参照されたい。(五六・八一〇)